拓殖大学 Shariah Research Institute
イスラーム研究所
معهد دراسات الشريعة
ニューズレター Vol.7 No.1

世界ハラール評議会（WHC）理事会参加報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 遠藤利夫

2009年5月6日（水）から同7日（木）の二日間に亘りマレーシアのクアラルンプールで開催された世界ハラール評議会（WHC）理事会に拓殖大学イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員長・武藤英臣客員教授と私遠藤シャリーア専門委員会委員の2名が参加したので報告する。

今回の理事会には事務局長及び9名の理事全員と他の委員会委員4名も参加した。今理事会では本年秋に開催される第7回年次総会の開催地決定を始め幾多の懸案事項が討議された。会場はクアラルンプール郊外にあるロイヤル・ビンタン・ダマンサラホテル内2階の会議場であった。

2009年度総会開催地の決定

今年の総会開催予定地については、中国、トルコ、ベルギー、インドネシアの四ヶ国からオファーを受けていた。各候補地の開催希望理由は次の通りであった。

中国・済南市：中国のイスラームの歴史は古く、現在のイスラーム教徒人口は中国政府発表では2千万人を超えており、ハラール食品のニーズは高く国内ではイスラーム教徒向けレストランは「清眞飯店」として古くから知られ親しまれてきた。近年は海外向けのハラール食品のニーズが高まり、東南アジアのイスラーム教徒向けだけではなく欧米向けにも輸出されておりハラール産業が高まりを見せている。

WHC理事会風景

トルコ・イスタンブール：トルコは政教分離の立場上、政府がイスラームに直接関与することは避けられているが、国民レベルでは先祖の選択した宗教として根付いている。今年は特にイスラーム諸国会議機構（略称OIC）の議長国でもあり、世界ハラール評議会総会の開催は議長国としての存在感をアピールできる。

ベルギー・ブリュッセル：世界ハラール評議会は過去アジア、アフリカ（2005年に南アで開催）で開催実績はあるが、ヨーロッパではまだ開催されていない。現在、欧州連合（ＥＵ）のイスラーム教徒の人口は二千万人を越えキリスト教につぐ第二の宗教となっている。ある機関の人口統計では2015年には三千万人に達すると予想されており、イスラーム教徒の市場が無視できない状況になりつつある。

インドネシア・ジャカルタ：インドネシア・イスラーム学者評議会付属食品・医薬品・化粧品検査研究所（LP POM MUI）が1999年にジャカルタで世界ハラール評議会の前身である「世界ハラール食品評議会（WHFC）」設立の立役者あったことから、LP POM MUIの代表が初代より現在まで世界ハラール評議会会長ポストを占めてきた。設立から10年の節目であることから再度インドネシアでの開催を期待している。

最終選考に当り中国（山東省イスラーム教会）代表スレイマーン氏の強い要請やサポート体制が評価され理事全員の賛成により11月5日、6日に中国・山東省で開催することが決定された。中国開催についてはスレイマーン氏が早くから地元開催を申し出ていたが他の開催候補国との調整がなかなか付かず、ようやく2008年の開催が浮上したものの、中国でのオリンピック開催年と重なったためフォロー体制に懸念があったことから延期要請を出さざるを得ず断念した経緯がある。従い、今回の決定は中国側にとり満足なものとなった。

また総会にさきがけ11月4日に現地で理事会を開催することになった。理事会内での総会窓口責任者は事務局長のリンザーク氏と武藤理事が選ばれた。また総会開催前の中国当局との打ち合わせや総会開催の円滑な進行を図るため3名の理事が事前準備のため11月2日に中国入りすることが決められた。

世界ハラール評議会（WHC）の登記

世界ハラール評議会が1999年に設立されて依頼、年々参加団体の増加と一部政府を含む各国のハラール機関との連携が強まるにつれ、現行の任意団体の形ではなく法的にも認知された団体として国に登録する必要性が高まっていた。登記国としては、イスラームを国教とし、またハラール産業育成にも力を入れているマレーシアで登記を行うのが大多数の意見であったが、マレーシアの登記条件の一つである役員数の条件と世界ハラール評議会の役員構成とに大きな差異があることが判明した。現在の世界ハラール評議会は会長、事務局長、理事、経理、各委員会委員という構成であるが、マレーシアでは、会長、副会長、事務局長、副事務局長、経理、そして理事6名が必要となっている。更にはマレーシア政府総理府イスラーム開発局（略称JAKIM）に団体として登録されていることが条件となっている。これに伴い次のような意見が出された。

- 世界ハラール評議会の組織形態そのものをマレーシアの法律に沿った形に編成し直す。
- マレーシアでの登記に必要な条件を満たすために世界ハラール評議会の憲章、規約を変更する。
- 国際ビジネスセンターである香港又はそれに類する国、都市で登記を行う。
- 世界ハラール評議会として特に登記する必要はない。信頼ベースで活動を行う。

・マレーシアでの登記はせず、登録可能な国で行う。
・ハラール認証を発行している団体がそれぞれの自国で登記する。
なお、事務局長のリンザージ氏が自国フィリピンで弁護士資格を持ち、法曹界で活躍していることからフィリピンでの登記を試みたところ、当局に受理され2009年4月に登録が完了した。本件の登記経緯については事務局長のリンザージ氏から登記簿のコピーをもとに説明がなされた。

世界ハラール評議会（WHC）の加盟申請様式制定

かねてより世界ハラール評議会に加盟するにあたり申請様式を整備する必要があったためメンバーシップ委員長エル・モエルヒ氏（オーストラリアHCAA代表）より12ページに及ぶ案が提出された。理事会において内容の検討がなされ、一部削除、変更、追加等を加え加盟申請様式のフォームが確定された。主要項目は次ぎの通りである。

1、団体名、住所、電話等。
2、団体の登録内容（法人格、登記内容等）。
3、団体の人員構成（イスラーム教徒数、技術者、査察者等）、活動内容。
4、イスラーム諸国での評価、信頼性。
5、認証・査察対象製品。
6、標準的な査察方式。
7、法的見解（ファトワー等の扱いも含む）。

今後、現在の加盟ハラール認証団体も含めすべての団体が記入提出することが決められた。

世界ハラール評議会（WHC）のレターヘッドの改訂

現在、世界ハラール評議会ではレターヘッドを使用しているが、会長、事務局長、副事務局長、本部名及び住所等が入っておりレターヘッドにそぐわないとの意見が出されたため、現行よりもシンプルな体裁にすることになった。新レターヘッドは世界ハラール評議会の名前と設立年（ＥＳＴ．1999）のみとすることになった。また、現在ロゴマークに使用されているアラビア文字は他の団体のもと比べ見劣りするので、よりインパクトのある字体に変更すべきとの意見がだされ早急に検討することになった。

評議会役員改選準備について

今秋中国で開催されることになった年次総会では理事を始め各委員会の役員改選年にあたるため、現役員の職務に対するリマインドがなされた。現在の委員会と構成人数は次ぎの通りである。在職期間はいずれも2年となっている。（カッコ内は団体略称）

1、執行委員会（9名）
日本（日本ムスリム協会／拓殖大学イスラーム研究所）、南ア（SANHA）、南ア（NIHT）、オーストラリア（AHFC）、ニュージーランド（NZIMM/NZIPF）、オランダ（HFFIA）、マレーシア（IFANCA/HFCIMA）、中国（SIA）、アメリカ（HFC SEA）
2、メンバーシップ委員会（5名）
オーストラリア（HCAA）、ドイツ（ICA）、南ア（SANHA）、南ア（ICSA）、オランダ（HFFIA）
3、技術委員会（5名）
アメリカ（HTO）、アメリカ（ISA）、インドネシア（LPPOM MUI）、ブラジル（IDCLA）、英国（HFA）
4、シャリーア委員会（5名）
ドイツ（ICA）、日本（JMA/TSRI）、南ア（SANHA）、インドネシア（LPPOM MUI）、マレーシア（IFANCA/HFCIMA）
5、調停委員会（3名）
フィリピン（IDCP）、南ア（ICSA）、南ア（NIHT）
6、選挙管理委員会（3名）
アメリカ（ISWA）、アメリカ（ISA）、日本（JMA/TSRI）

会議中の武藤シャリーア専門委員会委員長

マレーシアのハラール団体事務所にて

イスラーム諸国会議機構との協力関係構築

現在のところ、世界ハラール評議会はイスラーム諸国会議機構（略称OIC　1969年モロッコで開催されたイスラーム諸国首脳会議で設立が決議され、1971年に国際機構として正式に発足、サウディアラビアのジェッダに事務局がある。イスラーム諸国間の協力、連帯強化を目的とする。現在57ヶ国が加盟、オブザーバーが5カ国・8組織（国連など）　となっている。傘下にイスラーム開発銀行、イスラーム連帯基金、イスラーム教育・科学・文化機構、国際イスラーム通信機関がある。議長国は毎年持ち回りで2008年度はマレーシア、2009年度はトルコとなっている。）には加盟していないが、ハラール食品はイスラーム教徒の生活と密接な関係にあり、イスラーム教徒の人口増加に伴い今後もハラール認証の重要性が増してくる。世界のハラール認証団体が集まりハラール認証の標準化を進めていく上においてもイスラーム諸国会議機構と協力関係を構築することが望ましいとの認識に立ち、今回の理事会においてイスラーム諸国会議機構と連携方法について討議を重ねた。今年の活動としては世界ハラール評議会の理事長を団長とする派遣団を結成し、今年の議長国トルコの事務局トップと会談を行うことを決定した。

マレーシア・国際ハラール食品展（MIHAS 2009）視察

理事会期間中にマレーシア貿易開発公社主催による「第6回マレーシア国際ハラール食品展」（MIHAS）がクアラルンプールMATRADE（マレーシア貿易開発公社）コンベンションセンターで5月6～10日の会期で開催されていたが、世界ハラール評議会の理事も招待を受け視察する機会を得た。MIHASは地元食品メーカーを中心として2008年度には25ヶ国から500社が出展、バイヤーを中心に69ヶ国から40,000人以上が来場し、ハラール食品に特化したイベントとしては世界最大級の展示会で、今年度は昨年を上回る規模となっている。今年は日本からも2社が出展していた。

ハラール食品2009イスタンブール国際会議に参加して

イスラーム研究所客員教授　武 藤 英 臣

本年4月24日―26日トルコのイスタンブールで開催された「ハラール食品2009トルコ・イスタンブール国際会議」に出席した。本会議は、「Gida ve ihtiyac Maddeleri Denetleme ve Sertifikalandirma Arastirmalan Dernegi : GiMDES」(Association for Inspection and rtification of Food and Supplies, Istanbul, Turkey)【イスタンブール食品・糧食、検査・認証協会】が主催したものである。この認証協会は、トルコ国内では初めてのハラール認証団体として2005年にイスタンブールで設立されている。昨年初め、世界のハラール事案を主導するマレーシア、米国、インドネシアのハラール関係者を招き、ハラール啓蒙会議を開催しており、今回はその規模を拡大し“世界大会”としたものである。

参加国は、米国、カナダ、オランダ、ドイツ、英国、オーストラリア、ニュージーランド、マレーシア、インドネシア、タイ、アラブ首長国連邦、南アフリカ、キルギス、日本の14ヶ国であった。会議場はボスポラス海峡に面する「フィシャニ・イスタンブール国際会議・展示・文化センター」の大テント会場であった。会議の公式言語はトルコ語で、一部に英語同時通訳が行われたが、残念ながら米国、カナダのパネラー達でも、今回の会議目的、会議内容が判明しないと嘆くような具合で、更にプログラムはトルコ語のものしか無かった為、正確な内容については昨年暮れに主催者側がそのウエブサイトに載せていた英語版のプログラムを以下に訳出する。ただ、会議の開催前にアトラクションとしてトルコ軍楽隊の演奏がおこなわれたりして、会議を盛り上げようとする主催者側の熱意だけは伝わって来た。

会議プログラム

第一日目；

第一セッション「ムスリム社会が要求するハラール食品」

司会：ナドラ氏、インドネシア、イスラーム学者評議会付属食品・薬品・化粧品検査研究所（LPPOM-MUI）所長、世界ハラール評議会（World Halal Council：WHC）会長、

パネラー：

①ハイルッディーン氏　“ハラール食品認証の問題点”、トルコ、GiMDES科学委員会委員、

②ハマド氏　“ハラール食品に関する誤解”、米国カリフォルニア・イスラーム教育センター主宰、イスラーム食品・成分アメリカ評議会（IFANCAシカゴ）設立メンバー、

③ムスタファ氏“ムスリム消費者とハラール食品に横たわる障害”、トルコ、GiMDES食品科学委員、

④アリー氏“ハラール食品と信仰”、トルコ、GiMDES食品科学委員、

⑤メルブ氏“米国に於けるハラールとコシェールの競合、ハラール製品の注意点”、トルコ、米国ジョージ・ワシントン大学講師、

トルコ軍楽隊の演奏

第二セッション「ハラール基準の統一」

司会：ハイルッディーン氏、トルコ、GiMDES科学委員会委員、

パネラー：

①アブドルワッハーブ師“ハラール基準統一の必要性”、南アフリカ、南アフリカ国民ハラール信託協会（NIHT）会長、世界ハラール評議会（WHC）調停委員会委員長、

②ハムディ氏“聖典クルアーンと預言者言行録に於ける禁忌動物・植物食品、その物性変質（イスティハーラ）と質的変換（タガイユル）に関する見解”、トルコ、GiMDES科学委員会委員、

③ユースフ氏“啓典の民（ユダヤ教、キリスト教）に関する比較研究”、トルコ、GiMDES科学委員会委員、

第三セッション「ハラール経済システム－社会政治学と戦略的可能性の観点から」

司会：アハマド氏、米国カリフォルニア・イスラーム教育センター主宰、イスラーム食品・成分アメリカ評議会（IFANCAシカゴ）設立メンバー、

パネラー：

①セレン氏“ハラール経済システム－社会・政治・戦略的手段として”、トルコ、イスラーム法専門家、GiMDES科学委員会支援メンバー、

②ソムチャイ氏“ハラール経済システム－社会政治学と戦略的可能性の観点から－タイ国の場合”、タイ国イスラーム銀行総裁、タイ・ハラール基準研究所所長、

③グルドガン氏“経済と無利子金融システム－イスラームの観点”、トルコ、経済学者、ファティヒ大学講師、

第二日目；

第四セッション「生産者と消費者のハラール概念への対応とその問題点」

司会：セレン氏、トルコ、イスラーム法専門家、GiMDES科学委員会支援委員、

パネラー：

①フセイニ氏“生産者と消費者のハラール概念への対応とその問題点”、米国、アメリカ・ハラール財団（AHF）総裁、

②チョドリ氏“米国ハラール食品生産者の視点”、米国、イスラーム食品・成分アメリカ評議会（IFANCAシカゴ）所長、

③アブドッラオジェル氏“生産者のハラールへの取組み”、トルコ、イスタンブール商工会議所副会頭、

④イフィ氏“消費者のハラールへの対応、現代社会の問題点”、トルコ、消費者問題センター食品委員会委員長、

⑤デミール氏“消費者の要求にハラール認証は答えているか？”、トルコ、消費者厚生・食品委員会委員、

第五セッション　「世界のハラール認証プログラム」

司会：フセイニ氏、米国、アメリカ・ハラール財団（AHF）総裁、

パネラー：

①ナドラ氏“世界のハラール認証プログラム”、インドネシア、LPPOM-MUI所長、WHC会長、

②アブドッラヒーム氏“キルギスに於けるハラール”、キルギス、同国ハラール総局会長、同国ハラール技術・基準委員会委員長、同国イスラーム科学・医療研究センター創設者・事務総局長、

③ヤコブ氏“ハラール認証に於ける科学検査分析の重要性”、マレーシア、ハラール製品調査研究所所長、

④モウエルヒ氏“ハラール市場、オーストラリア・ハラール認証総局の経験から”、オーストラリア、ハラール認証総局会長、

⑤イッズ氏“ハラール食品－必要とされることは？”、スーダン、アブダビ食品監督委員会、

第六セッション「ハラール市場の急拡大」

司会：サーディク氏、マレーシア、IFANCA欧州代表、

パネラー：

①サイラーリ氏“ハラールのグローバル性”、カナダ、ハラール産物開発サービス（HPDS）議長、

②ハーリッド氏“急成長するグローバルなハラール食品市場”、UAE、国際ハラール連邦（IHI）ハラール基準・システム部長、

③カーン氏“国内外のハラール市場”、トルコ、ムシアド食品協議会委員長、

本会議が始まる前日4月24日（金）には記者会見が行われ、私と以下の人たちがインタビューを受けた。

・米国ワシントンDCにあるIslamic Society of the Washington Area. Inc. 及びUSA Halal Chamber of Commerce, Inc.代表のレバノン出身ハビーブ氏と同氏事務所マネージャーである二女サフィーア嬢

・米国カリフォルニアのIslamic Education Center 代表、シカゴIFANCAシャリーア委員、アハマド師

・首長国連邦のAbu Dhabi Food Control Authority、アブドッラティーフ氏（スーダン国籍）

・マレーシアのInternational Halal Integrity Alliance Ltd.、イッズディーン氏

・ドイツ・フランクフルトのハラール認証団体BDHWを主宰するタタリ氏（シリア出身）

・ニュージーランド認証団体N.Z. Meat Management代表アブドルアール氏（エジプト出身）

・タイのイスラーム銀行総裁、ハラール基準制定委員会委員長、ソムチャイ氏

・キルギス共和国イスラミック・センター・ハラール認証代表、ハラール製品サービス基準化技術委員会委員長アブドッラヒーム氏

昨年の2008イスタンブール・ハラール食品会議に参加していたアハマド師が外国勢を代表し、トルコ・イスタンブール食品・糧食検査認証協会会長フセイン師、トルコ・アナトリア・ビジネスマン協会（ASKON）ムスタファ会長、同シドキ副会長ら5名が雛壇に並び、会場のメディア関係者の質疑に応答する形式をとった。

会場はイスタンブールのアジア側地区中心部の7階建ビル5階にある教室程の部屋で記者席は30脚程の椅子が並んでいた。我々外国勢は雛壇の右側に整列していた。10時半からの記者会見とのことであったが、記者が三人程居るだけであった。暫くメディアの参集を待っていたようであったが、これ以上集まらないのか、11時になって、ASKONのムスタファ会長から今回のGiMDES会議はトルコの輸出産業に多大な貢献を期待する旨の簡単な説明と挨拶で始まった。次いで、GiMDES会長フセイン師が一時間近く喋った。幸い私の隣のキルギスのアブドッラヒーム氏が理解出来るようで時々小声で内容を説明してくれた。しかし会場には先程の3名の記者がいるだけで、図らずもトルコでのハラールに対する関心の低さを示す結果となった。

エジプト・イスラーム最高評議会大会報告

イスラーム研究所所長　森　伸生

はじめに

3月5日～8日、エジプト政府・ワカフ（寄進財産）省主催、エジプト・イスラーム最高評議会に、イスラーム研究所客員教授・武藤英臣氏とともに招待され、出席した。この会議は毎年、開催されていて今年で二一回目である。3月5日朝の開会式ではクルアーン読誦に続いて、主催者を代表してザカズーク・ワカフ大臣、参加者代表のイフサーンオール・イスラーム諸国会議事務総長、シャヌーダ・アレキサンドリア教皇、タンターウイ・アズハル総長、ムバーラク・エジプト大統領（ナゼーフ首相代読）のスピーチがあった。今年の大会テーマは「イスラーム思想の再生」であり、海外七五カ国から、ムフティー（イスラーム法学裁定を出す法学者）、宗教省関係者、イスラーム大学の学長、イスラーム法学者、イスラーム組織代表など約150人、国内から約200名が参加し、討議が行われた。大会は四日間の午前、午後、夜の部で行われ七九人が発表した。発表はアラビア語、フランス語、英語で行なわれた。

最終日に出された大会決議の中で、特に強調されていたことは、イスラーム社会でのウラマー（イスラーム諸学を修めた学者）の責任である。そして、現在のイスラーム世界が直面する諸問題を解決するためにはイスラーム諸学の再生が必要であり、そのためにイジュティハード（専門家によるイスラーム法解釈行為）が重要となる。預言者ムハンマドの言葉「神は世紀の初めごとにこの共同体にその宗教を再生する者を遣わす」とあるように、その再生はイスラーム共同体に課された責務である。同時に、イジュティハードはイスラームの基本的理念やイスラーム的中庸性を無視することなく、社会の安定を目的としたものであることが確認されていた。

このような決議を出す背景には、インターネットの普及によりイスラームの様々なサイトにて伝統的なウラマーでなくても、自由な解釈を示すことができ、それに一般の人がアクセスして回答を得ることができる現状がある。そこでは、伝統的なウラマーの存在意義が危うくなっているといえる。自由なイスラーム解釈によって、緩やかな解釈だけに偏ってしまったり、より厳格な解釈になったり、さらに政治的に過激な解釈が行われて、その影響が懸念されている。

会議風景

会議の最終日には、アズハル大学のタイイブ学長と面談する機会を得た。学長から、「研究所では、様々な人が参加できるように門戸を広げ、多くの意見が反映できるように心掛けてください。往々にして、イスラームの人々は自分達だけで固まってしまいます。そのようなことがないようにしてください。アズハルでも、そのような趣旨により、シャリーアを英語で説明できるようにな人物を育てることを試みています」と助言を頂いた。また、エジプトのムフティー、ジュムア師とも面会することができた。同師は「研究所では、様々な質問が寄せられることと思います。ひとつひとつ丁寧に対応していくことが大切です。私が回答しましたファトワー集ができましたので進呈します。どうぞ、これも参考にしてください。研究所がイスラーム世界との架け橋になることを祈っています。」と我々を激励した。タイイブ学長はイスラーム教徒と他者の対話を重視し、そしてジュムア師はイスラーム教徒間の絆の重要性を論しており、二人とも私にとっていい刺激となった。今回の会議によって世界各国のイスラーム学者と知り合い、お互いの信頼を深めることができたことは、非常に有意義であった。以下大会決議の要旨を紹介する。

1. 大会主要テーマ：「イスラーム思想における再生」の大会決議事項から（要旨）

（1）イスラーム思想の再生の在り方
1）預言者の伝えた正しいイスラーム理解を基本
2）曲解にて歪んだイスラーム理解の是正および正当な理解の再生
3）ウラマーは世界の諸問題に対するイスラーム法的解釈を提示
4）イスラーム諸専門家の意見交換をもとに、イスラーム法解釈を提示
5）戦争、紛争を回避するために、人間性を基盤とした平和達成のためイスラーム内外の知識人との関係構築
6）イスラーム諸学の再生は生活の発展と時代の躍進のために必要

（2）伝統の重要性再認識
1）ウラマーはイスラーム文化遺産を基本に諸学の発展、諸民族の平和的共存に尽力すること
2）第二代カリフ・ウマル（529～644）、ハナフィー学派の祖アブー・ハニーファ（699～767）、シャーフィイー学派の祖アッシャーフィイー（767～820）、ハンバル・イスラーム学者イブン・タイミーヤ（1258～1326）、詩人・哲学者ムハンマド・イクバール（1877～1938）、革命家ジャマールッディーン・アルアフガーニー（1838/9-97）、思想家ムハンマド・アブドゥ（1849-1905）などの知的偉業を重視

（3）イスラーム思想再生のための留意事項
1）イスラーム研究においては中庸を旨とし、過激性や極端性を排除すること
2）ファトワー（イスラーム法的回答）はウラマーの合意を基本とすること
3）イスラーム思想再生には人格的側面を重視し、イスラーム的理念との矛盾を排除すること

（4）再生を担う後進育成の重要性と必要性
1）イスラーム大学での教育の充実
2）イスラーム共同体の諸問題に対処できる自由な研究を行うためにイスラーム社会において思想的、学問的、文化的生活環境の充実
3）ファトワーやイジュティハード（専門家によるイスラーム法解釈行為）を担う人材育成に諸大学の中で特別訓練機関の設置
4）科学・技術の目的はイスラームの知性を強化しイスラーム社会発展、国際社会の発展に寄与するためである

2. ワークショップ「諸宗教・諸文化間の対話にむけて」

ここでは諸宗教・文化間対話の問題について、討議された。

決議内容：要約

（1）国際社会で生起している問題に関してイスラーム的理解や判断の啓蒙努力
（2）人類の平和、安定の実現、共存共栄のため諸啓示宗教間の共通理念や認識の提示
（3）アラブ・イスラーム諸国は「諸宗教に対する中傷は罪となる」決議を国連に要請
（4）世界の諸宗教は「宗教への中傷や非難的行為を停止する」ために団結
（5）国内外において、思想、表現の自由な活動の保障
（6）対話の重要性を民衆に徹底化
（7）女性問題や人権問題など誤解是正のために正しいイスラーム理解普及にインターネット活用

3. 政治的決議から

（1）ダルフール紛争をめぐり戦争犯罪に問われたスーダンのバシール大統領に対する国際刑事裁判所（ICC）の逮捕状拒否を国際社会に訴える。
同様に国際組織のダブルスタンダード姿勢を避けるように国際社会に訴える。特に、イスラエルに関連した国連決議などについてである。

（2）アラブ・イスラーム諸組織、世界の人権団体はイスラエルが最近行ったガザに対する戦争犯罪の調査、記録のために尽力し、国際裁判所に訴えることを求める。

（3）アラブ・イスラーム諸国は国内に問題を抱えている場合にはそれを解決するために最大に尽力し、外からの内政干渉を受ける手段とさせないことを求める。

（4）平和利用のための核所有は諸国家の権利である。世界に核兵器開発、製造禁止を求め、国連、IAEAに同時アラブ諸国内における大量破壊兵器廃棄の実現を求める。

4. まとめとして「カイロ宣言」から

（1）イスラーム諸学の再生のためにイジュティハードの必要性
預言者の言葉「神は世紀の初めごとにこの共同体にその宗教を再生する者を遣わす」

（2）イスラームの基本的理念やイスラーム的中庸性を無視することなく、社会の安定を目的とした再生の必要性
預言者の言葉「イジュティハードを行って、正答を得た時は二つの（来世での）報償があり、誤答を得た場合には一つの報償がある。」（イジュティハードが善行であり、有識者が行う時は誤答も許されることが示されている。）

《中央アジア事情》ロシア・中国の影響力拡大に苦慮する米国

イスラーム研究所兼担研究員　中 島 隆 晴

近年中央アジアを巡る米露中三大国の中央アジアを巡る主導権争いはますます熾烈化しつつある。しかしここ数年ロシア・中国両国が急速に中央アジアへ影響力を拡大しているのに対し、米国は次第に劣勢に追い込まれつつあるのとの指摘がある。本稿では米露中三大国の中央アジアにおける現在の勢力関係を考察すると共に、米国が劣勢に立たされている理由を検証してみたい。

米国と中央アジア

今年はじめ、米国のNIC（国家情報局）は2025年までの世界情勢に関する包括的な報告書を発表し、その中で中央アジアを「米国の外交政策上最重要地域の一つである」と位置づけた。しかしこの報告書では「今後米国の中央アジアにおける影響力は次第に低下し、ロシア・中国の影響力が強まるだろう」と悲観的な指摘をしていることが注目される。NICの報告書の中で明らかにされているように、近年米国の中央アジアにおける影響力は弱体化しつつある。その最大の要因は経済政策の失敗である。周知のように米国は1991年の中央アジア各国の独立達成以来、積極的な関与を続けてきた。米国が中央アジア地域に関与した最大の要因の一つは同地域の豊富な天然資源の開発にあった。冷戦体制の崩壊以後、世界各地で民族間対立問題や反米を掲げる国際イスラーム過激派組織等の活動が頻発し世界は急速に不安定化の傾向を強めた。一方この傾向は中東地域においても顕著となり米国とって非常に重大な問題となった。なぜなら中東地域は米国の最大の天然資源の輸入先であり、不安定化する中東地域に依存し続けることが米国のエネルギー安全保障上極めて危険となったためである。そこで米国は自国のエネルギー安全保障体制の確立のため天然資源の輸入先の多角化を模索し、その候補として中央アジア地域に大きく注目するようになったのである。

中央アジアの天然資源

一方で石油・天然ガス資源に恵まれた中央アジア各国（特にウズベキスタン・カザフスタン・トルクメニスタン）は独立後の経済開発の主眼を天然資源の輸出拡大に置き、米国と積極的に資源開発面における協力関係を構築した。当時中央アジア各国が経済開発面で米国を頼りとしたのは中央アジア各国とロシアの関係である。旧ソ連時代を通じ中央アジア各国はロシアに石油・天然ガスを輸出する生産基地の役割を担わされ、中央アジア地域から天然資源を輸出するルートはロシアのみに限定されてきた。独立後もロシアは中央アジア各国から天然資源を購入し続けたが、それは国際価格と比較して不当に低い値段であった。ロシアは中央アジア各国から低価格で購入した天然資源を欧州を中心に数倍の価格で転売して多額の利益を上げていたのである。中央アジア各国は天然資源の購入価格の引き上げをロシアに要求したが受け入れられなかった。このように中央アジア各国は天然資源の輸出面でロシアに依存せざるをえない状況が続いた。最終的に「現状では自立した経済体制の確立は困難である」と考えた中央アジア各国はロシアを経由しない新規の天然資源輸出ルートを米国と協力することで建設することを熱望したのである。

天然資源パイプライン計画

こうして「共通の利益」を確認した米国と中央アジア各国は資源開発協定を締結したのち、具体的な新規天然資源輸出パイプライン建設計画に着手した。中央アジア地域は外洋に接しておらず、天然資源を国外に輸出するには多国間を経由する新規天然資源パイプラインの建設が不可欠であった。そこで米国主導で立ち上げられた計画が、TAPパイプライン（トルクメニスタン～アフガニスタン～パキスタン天然ガスパイプライン）であった。

しかし、TAPパイプラインの建設計画は非常に困難を伴い、現在までに予定していた結果を十分に達成できていない。TAPパイプラインはアフガニスタンを横断する計画だが、そのためにはアフガニスタンの政治的安定が不可欠となる。しかし現在アフガニスタンは依然として安定にはほど遠く、米国が支持するカルザイ政権の支配地域は首都カブール周辺に限定されている。加えてアフガニスタンではかつての支配勢力であったタリバンの残党や、それを支援するアル・カーイダや中央アジアのイスラーム勢力IMUの残存勢力などによるカルザイ政権へのテロ活動も活発である。現在TAPに関する関係国間の協議は継続して行われているが、国内外の専門家の多くは「現在のアフガニスタンの混乱した状況下でパイプラインを建設したとしてもパイプラインの安全性が図れない。現状では計画の実現にはかなりの困難を伴う」として本計画に関してかなり懐疑的である。米国は中央アジアからの天然資源輸出政策面で完全に手詰まりの状況にある。

このように米国の天然資源輸出パイプライン建設計画が予定通りに進展しないことに気がついた中央アジア各国は、1990年代後半から改めてロシア・中国方面の天然資源の輸出に注目し始めた。米国主導の計画がいかに大規模かつ多額の収益をもたらすとは言え現状では「絵に描いた餅」に過ぎず、ならば「ロシアや中国と交渉した上で天然資源の輸出を拡大した方が現実的である」と方針を転換する動きを本格化し始めたのである。

ロシア・中国両国は中央アジア地域からの天然資源輸出面でインフラ、地理面で米国より圧倒的優位な状況にある。中央アジアには旧ソ連時代を通じて建設されたパイプライン網があり、既存のパイプラインを改修、または一部の設備を新規に追加建設するだけでロシアを経由して天然資源輸出を拡大することができる。

ロシアは現在に至るまで依然中央アジアの天然資源を欧州地域に輸出するルートをほぼ独占している。この点がロシアの最大の強みであるが、そのため天然資源の輸出価格面で中央アジア各国は不利な状況を強いられる原因ともなってきた。そこでロシアは1990年代後半に入ってトルクメニスタンをはじめ中央アジア各国からの天然資源の輸入価格を是正する動きを見せた。ロシアのガスプロムは2003年にトルクメニスタン政府と2028年まで年間900億m^3の天然ガスを購入する長期契約を締結し、2009年からは年間500億m^3のガスを1000m^3あたり150ドルで購入することを決定した。ロシアが大幅な天然ガスの買い上げ価格の値上げを決定した背後にはトルクメニスタンをはじめ中央アジア各国のロシア離れを防止する点にあったが、それを可能としているのは近年のロシアの経済力の発展である。ソ連崩壊の直後、破産寸前であったロシアは今や4000億ドルもの外貨準備高を保有する世界有数の国家となった。金融危機の影響を受けたとはいえ、ロシアは中央アジアにおける資源獲得競争で地理・経済力の両面で米国より圧倒的優位な状況にある。

一方中国も近年中央アジア各国の主要な天然資源輸出国となっている。中央アジアから中国への天然資源輸出も中央アジア全土に存在するパイプラインを接続すれば比較的容易である。中国西部のウイグル自治区と隣接するカザフスタンはすでに米国主導の計画ほど大規模ではないにせよ、中国との間で新規の石油輸出パイプラインを完成させ実動にこぎつけている。カザフスタンが具体的に中国政府との間で石油輸出に合意したのは2005年で、2006年6月には歴史上初めてカザフスタンの石油が中国に輸出されている。

中央アジアにおける米国の地位の低下

このように中央アジア各国はロシア・中国両国との経済関係で米国よりも確実な外貨収入を得ている。中央アジア各国はロシア・中国との間で一定の政治的妥協を強いられるケースも少なくないが、それでも「実利」をもたらす関係を重視する傾向が強まっている。この点で米国との関係が希薄化していくのはある程度止むを得ず、現状では米国はロシア・中国の実利的な中央アジア経済外交に対抗する有力な手段を有していない。これまで国内外の中央アジア研究者の間では「いかにロシア・中国両国が中央アジアにおける影響力を拡大しても米国の影響力がゼロになる可能性はない」と考えられてきた。なぜなら中央アジア各国はこれまで米露中三大国に対して「等距離外交」を基本としてきたためである。中央アジア各国は旧ソ連時代にロシアの支配下に置かれた経験から一つの大国だけには依存せず、必ず残る二つの大国ともバランスを取ることで自らの「保護者」を多様化させる政策を実行してきた。三つの大国のバランスを取ることで自らが得られる利益を最大化しようとするのがこれまでの中央アジア各国の基本であった。しかし、米政権が交代した時期を狙ってキルギスが米軍事基地閉鎖を発表するなど、すでに「等距離外交」の選択肢の中から米は除外されつつあるのかもしれない。我々が想像する以上に中央アジアにおける米国の立場は苦しいものになりつつある。

正統四代カリフの時代（2）

イスラーム研究所所長　森　伸生

《前号からの続き》

預言者に忠誠の誓いを立てる者はその誓いを解消することはできない。その誓いを解消する者はアッラーとの誓約をも破棄することになり、アッラーの怒りをこうむることになるからだ。

以上のような状況の中で、教友達の暗黙の了解の上に成り立っていた後継者承認方法である忠誠の誓いは正統カリフとイスラーム教徒の間でそれぞれに行なわれていた。まず、アブーバクルの場合はアンサールに対するムハージルーンの優位な立場が明らかにされた時、教友達はアブーバクルを選出し彼に忠誠の誓いを行なった。ウマルの場合も、アブーバクルの指名を受けて、指導者層が彼に忠誠の誓いを行なった後にマディーナの住民が忠誠の誓いを行なった。ウスマーンの場合は指導者層の協議の結果選出され、指導者層がウスマーンに忠誠の誓いを行なった。アリーの場合も同様に統治の中心地であるマディーナの住民が忠誠の誓いを行なった。

しかし、イスラーム世界の拡大と共に、ウスマーンとアリーの時代になると政治的にも不穏な動きが見られだした。

このような政治的分裂の兆しは後に忠誠の誓いにも影響を及ぼした。忠誠の誓いはウマイヤ朝及びアッバース朝の初期のカリフ達にも行なわれたが、それは以前の忠誠の誓いとは意味が違っていた。正統四代カリフ時代には忠誠の誓いは自由意志によって行なわれるのが基本であったが、ウマイヤ朝以後になると忠誠の誓いは形だけを踏襲した強制的服従と言う形になった。

正統四代カリフ以後のカリフは自称カリフであったが、カリフの条件から大きく離れた諸王朝の君主であり、帝王であった。

社会的条件のもう一つは協議（シューラー）である。これはイスラーム制度全般における基本である。カリフにしても共同体の指導者層の協議を経て選出されなければならない。正統カリフの選出方法はアブーバクルにしても協議を経て選出され、ウマルにしてもアブーバクルの指名を受けるが、アブーバクルは指導者層と協議の結果ウマルの指名を行なった。ウスマーンのカリフ就任は指導者層による協議そのものであった。アリーの場合はマディーナの指導者層の協議の結果推挙された。

カリフとイマーム

スンナ派では、預言者の後継者のことを、先に挙げたカリフまたはアミール・アルムウミニーンの他に、もう一つイマームとも称するが、イマームは長を示す普通名詞なので、礼拝のイマーム（導師）と区別するために、カリフを意味する場合には最高イマームと呼ぶことが多い。

しかし、シーア派は預言者の後継者にイマームという称号だけを用いている。シーア派にとってはイマームは宗教の柱であり、基本信条であり、特別な意味を持った存在である。

スンナ派にとっては、預言者以降の統治者決定権は共同体に帰属し、共同体がその構成員から指導者を選出し、彼に統治権を与える形で預言者の後継者が決定される。

シーア派にとっては統治者決定権はアッラーにあるとして、アッラーが預言者の後継者を神託によって定めるのであり、共同体はこの選定に全く関与することはないと主張する。シーア派では、預言者のいとこであるアリーが預言者の直接指名により後継者に任命されたと主張している。アリーに先行する三人のカリフをアリーの権利の簒奪者であるとみなし、同様にウマイヤ朝、アッバース朝のカリフ達もアリーの子孫の権利を剥脱した者達であるとして認めていない。後継者の選出方法はスンナ派におけるように共同体の選択に任せるのではなく、各後継者が自分の後継者を指名によって決定すべきであると主張する。シーア派における後継者の資質は多々あるが、その中でも最も重要なものは無謬性である。無謬性はイマームにカリスマ的性格を与えるものである。カリスマ的性格を付与されたイマームはクルアーンの奥義的な意味を解釈し、教義の解釈とその決定に絶対的な権威を持つことになる。このようなイマームを中心にした教義が創られたのも、ウマイヤ朝との政治的抗争に破れた時点で少数派としての性格が決定づけられ、シーア派の団結を固めると同時に政権奪取のためにも独自の教義が必要とされたからである。

スンナ派のカリフと根本的に違う点はシーア派のイマームは教義の中核をなしていることであり、イマームへの信仰は信仰箇条の一つとされていることである。

立法権にしても、シーア派ではクルアーンの奥義的な解釈を行なうイマームが立法権を有することになる。それ故、ハディースにしてもアリー以下のイマーム達が伝承する預言者の言行および歴代イマームの言行によって構成されていて、それが法源となっている。

スンナ派においては、立法権は預言者ムハンマドだけが有することであり、そのことはアブーバクルがカリフ就任時に述べた言葉に表されている。「私がアッラーとアッラーの使徒様に従っている限り、私に従って下さい。私がアッラーとアッラーの使徒様に反していたならば、私に従う必要はありません。」

スンナ派においては、カリフに無謬性はなく、立法権を有するわけでもない。カリフといえどもクルアーンとスンナを規範とした行動から外れることは許されない。一介のイスラーム教徒にすぎないのである。

第一代正統カリフ・アブーバクル

はじめに

ムハンマドが教えを広めるにつれ、彼の教えを信じ彼のために命をも惜しまない純真な人々が現れた。彼らは預言者の教友（サハーバ）と呼ばれていた。教友は預言者から直接、イスラームのメッセージを聞いた人達である。彼らは預言者と行動を伴にし、預言者を敬愛し、預言者を助け、預言者がもたらした導きに従い、世界各地にイスラームの光を照らす任務を遂行した。

預言者亡き後の教友時代にイスラームはアラビア半島から東はペルシャ、西は北アフリカへと広がった。飛び出していく教友達の心にはアッラーの啓示・クルアーンと預言者の教え・スンナが刻まれていた。さらに、教友一人一人が後世の信徒の良き模範となった。信徒にとって、預言者と共に苦難の道を乗り越えてきた教友の伝記は遠き先人の物語ではなく、あたかも昨日の出来事のように親しまれ、親から子へ子から孫へと語り継がれて、人々の心に感動を与えてきた。

そこで、教友の中でも代表的な人物、預言者亡き後を受けて、イスラーム共同体の指導者となった正統四代カリフに焦点をあてて、それぞれの人物像に迫ってみたいと考えた。正統四代カリフそれぞれの個性によって、信仰表現の違いはあるが、それぞれがアッラーの意図に添うことを望み、イスラーム教徒全体の安寧を願う気持ちに変わりはなかった。そのようなカリフ一人一人の人生を通して、彼らが来世の幸福を望みながら現実生活の中に如何に預言者の教えを具現しているかを見てみたい。

第一章「ジャーヒリーヤ時代におけるアブーバクル」

アブーバクルの出生・家系

アブーバクルは預言者ムハンマド誕生の年「象の年」から約2年半後にマッカで生まれた。「象の年」については諸説あるが、イスラーム教徒の間では西暦570年頃と考えられている。

アブーバクルの幼少および青年時代についてはあまり詳しく伝えられていない。彼の両親については尚更明らかではない。しかし、家系については、アブーバクルがイスラーム教徒になり、イスラーム史で重鎮の一人となったことにより、アラブの常であるが、歴史家達は彼の家系を探り明らかにした。

伝えによると、アブーバクルはクライシュ族タイム家出身であり、預言者の家系に繋がり、北アラブの祖アドナーンまで遡ることができる。

6、7世紀頃マッカを支配していたクライシュ族は10氏族ほどに分かれていたが、それぞれの氏族がカアバ神殿に関わる権利や役職を分担していた。クライシュ族は大きく二つに分かれ、アブド・マナーフ系の氏族は「巡礼者の水の管理」と「巡礼者の食糧の管理」の権利を持ち、アブドッダール系の氏族は「カアバ神殿の管理」及びカアバ神殿の北側に建てられていた「部族会議場の管理」の権利を持っていた。

他の役職もそれぞれの氏族に任されていた。例えば、「指揮官職」はマフズーム家が担当していた。これは勇将ハーリド・ブン・アルワリードの家系である。「賠償金の交渉」の権利はタイム家が持っていた。イスラームが現れる直前には、タイム家の家督はアブーバクルが引き継いでいた。クライシュ族の中で賠償金問題が複雑になった時には、その解決にあたって、必ずアブーバクルに意見が求められていた。また、タイム家に何か問題が生じると、アブーバクルがそれをクライシュ族に説明していたが、クライシュ族はアブーバクルの人柄を信頼していたので、彼の説明に疑念を挟む事無く、問題解決のための援助要請などに即座に応えていた。しかし、彼以外の者が説明に出向くと、その要請はなかなか受け入れられないことがあった。

タイム家はアラブの伝統をよりよく受け継いでいた氏族であり、勇敢さ、気前のよさ、隣人の保護などでよく知られていた。

（以下次号へ続く）

クルアーン入門講座（4）

イスラーム文化の二面性

イスラームをシャリーアという法体系で捉えて行く方法は、イスラーム社会に強固な社会制度を確立した。またこれを行った学者達はその時々の政治権力と結び付き、自らを共同体の支配者の地位に組み込んで行ったのは当然の成行きであった。これに対して内面を重視する人々は反体制派にならざるを得ず、しばしば政治権力側から異端者として迫害された。しかしこれらのまったく対立する文化パターンがあったからこそイスラーム文化は外面と内面を共に備えた文化になることが出来たといえるのである。

内面からのイスラーム

イスラームを内面から捉えようとする人々は表に現れたどんな事柄もその奥には目に見えない隠された真理が存在していることを確信し、それを追求して行こうとする。彼らは、この隠された真理・実存をアラビア語で「真理」を意味する「ハキーカ」と呼んでいる。イスラームの外面を表すのがシャリーアだとすれば、それを不可視の根底から支えているのがハキーカであるというわけで、シャリーアだけで全てを解釈することは不十分であると考えるのである。しかし彼らにしてもこのハキーカを重視する余り、シャリーアを無視しイスラーム共同体をも否定してしまうケースが出てきて悲劇が起こる場合が多々あった。このハキーカを重視する人々も大きく二つのグループに分けることが出来る。一つはシーア派的イスラームであり、もう一つはスーフィズムと呼ばれるイスラーム神秘主義である。

シーア派的イスラーム

最近シーア派はスンニー派と並ぶ二大宗派のようにいわれるが、シーア派自体はいくつもの分派(注1)に分かれていて複雑な様相を呈しているので、ここではイランを中心として最も大きな勢力を誇る十二イマーム派を中心にその特徴を見て行きたい。

この十二イマーム派は預言者ムハンマドの死後の正当な後継者（カリフまたはイマームと呼ぶ）をアリー（スンニー派では第三代目カリフ）とし、彼の直系の子孫が代々イマームを引き継いで来て、十二代目イマーム、ムハンマド・ビン・ハサンの時、彼が突然姿を消してしまったために、それ以降のイマームは認めないというもので、彼はやがて終末の日の近くに再び救世主としてこの世に姿を見せると信じられている。それまでの間、彼は隠れイマームとして不可視の世界で生きていることになっているのである。故ホメイニー師がイマームと呼ばれていたが、正確には彼はその代理人であるにすぎない。

一方、スンニー派ではイマームは集団礼拝の時に人々の前に立って、その礼拝を導く先導者の意味だが、シーア派ではもっと重要な意味を持っている。シーア派におけるイマームの位置は預言者ムハンマドに次ぐもので、彼だけがクルアーンの奥に隠された真理「ハキーカ」を認識することが出来て、一般の信者をその内的意味の深層まで導くことの出来る人なのである。このようにクルアーンを内面的に解釈できる資格を持つ者をこのイマームにだけ限定するのがシーア派の立場である。

スーフィズム（イスラーム神秘主義）(注2)

シーア派においてはイマームはアリーの直系の子孫にしか認めないが、この血縁による条件を無くし、広く存在の内面的本質（ハキーカ）を認識する人を想定することが出来るはずである。その場合その人物はイマームではなくワリーと呼ばれる。この「ワリー」というのはアラビア語で「親しい人」とか「近しい人」といった意味から来た言葉で神と親しく交わることの出来る人という意味になる。正にスーフィズムにおいてはこのワリーがハキーカを認識することの出来る人になるのである。そしてこのワリーには非常な厳しい修行によってなれるのである。彼らにとって最終的な目標は神と一体化することである。そのために彼らは現世を否定し、禁欲的な苦行を実践することにより、自分の魂の奥に潜む神(注3)を見つけ合体することを切望するのである。これはクルアーンのマッカ啓示に見られる終末と審判に対する恐怖や人間の罪深さに対する警告など、特に個人と神との関わりを強調した啓示を強く意識することにより育っていったものと思われる。

社会に背を向け、ひたすら自らの内に神を求めるスーフィー（神秘主義者）達はイスラーム共同体の中では異端にされがちで、迫害されてもきた。しかし彼らの存在がイスラーム文化に精神的な深みを与えたことは間違いない。

イスラーム文化に見る三つの底流

このようにイスラーム文化を見てみると、その根底には大きく三つの流れを見ることが出来る。一つはスンニー派に代表されるイスラーム共同体を支える律法を中心にクルアーン解釈を発展させていった流れである。二つ目は、シーア派に代表されるイマームによるクルアーン解釈を中心にして来た流れである。そして三つ目はスーフィズムに代表される、あくまでも個人による内面からのクルアーン解釈を通して真理を目指す流れである。これらはそれぞれ、歴史的に対立したり、緊張したりしながら今日のイスラーム文化を形作って来たといえよう。そして忘れてならないのは、これらのすべてがクルアーンという一冊の書物の解釈から生まれ発展してきたことである。

（注1）シーア派には12イマーム派以外にも多くの分派があるが、いくつか主だったものを挙げる。**ザイド派**：この派はザイド・ビン・アリーを第5代イマームと主張することから名付けられた。この派はシーア派の中では最もスンニー派に近く、シャリーアについてはスンニー派の4法学派とほぼ同じである。この派の特徴は、イマームがアハル・ル・バィト（預言者ムハンマド家の人々）の家系であるが、アリーの息子のハサンとフセインの血を必ずしも引いている必要はないこと。終末近くに現れる隠れイマームの存在を認めないこと。学識があることなどである。この派は現在、北イエメンの人口の半分を占めていると言われている。**イスマーイール派**：6代目イマーム・ジャアファル・アッサーディクの長男イスマーイール（765年没）は父の存命中に亡くなったが、7代目イマームを弟のムーサー・カーズィムとして信奉した人々が12イマーム派である。一方、イスマーイールの息子のムハンマドを7代目イマームと信奉し、この系譜がイスマーイール派になった。そしてこのムハンマドの死後のイマームを認めないのが、その指導者のハムダーン・カルマットにちなんでカルマット派と呼ばれた。この派は略奪や残虐な行為でムスリムたちから恐れられていた。またこのイスマーイール派を継承したファーティマ朝はムハンマドの息子をイマームと認めたためにカルマット派と対立した。カルマット派はその後消滅。ファーティマ朝のカリフ・ハーキムが1021年に没したが、その死を認めない者たちが分裂して出来たのがドルーズ派である。その後、カリフ・ムスタンスィルの死（1094年）により、さらにムスタアリー派とニザーリー派に分裂し、イスマーイール派は消滅する。ドルーズ派は現在もレバノン、シリアの山岳地帯を中心に少数ながら存在する。またイスマーイール派から別れ、現在も存在する分派としてはアラウィー派が有名で、シリアのラタキヤを中心に分布するがシリアの人口の一割を占めていると言われている。

（注2）アラビア語でスーフィズムは「タサゥウフ」と呼ばれ、それを行う人を「スーフィー」と呼んだ。何故そのように呼ばれるかについてはいろいろな説があるが、一般的には「スーフ」（羊毛）というアラビア語から派生したものと考えられている。つまりスーフィーとはスーフを着た人と言う意味で、当時、羊毛は粗末な衣服であると同時に、砂漠で修行に励むキリスト教修道士の服でもあった。それは現世の贅沢や欲を捨てた人々の着る服として受け入れられ、隠遁生活に入ったイスラームの神秘主義者たちをそう呼ぶようになった。

（注3）魂の奥にある神ークルアーン第五〇章一六節に「われは（人間の）頸動脈よりも人間に近いのである」とあることから自らの内面をたどって行けば最終的には神に行きつけるものと考える。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585　東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419　FAX：03-3947-9416
ホームページURL. http://www.cnc.takusyoku-u.ac.jp/

平成21年6月25日発行　第23号
発行人　拓殖大学イスラーム研究所
編集人　イスラーム研究所主任研究員
柏原　良英

拓殖大学　イスラーム研究所 ニューズレター

ムハンマドとイスラームの誕生（8）

（17）バドルの戦い

この啓示（戦い許可）の後、624年3月（H．2年9月）に、イスラーム共同体に大きな影響を与えたバドルの戦いは勃発した。この月、ムハンマドはクライシュ部族の隊商が1000頭のラクダを連ねてシリアからマッカへと戻ってくるという情報を得た。この大隊商にはアブー・スフヤーンの率いる70名の護衛が付いていた。ムハンマドは86名のムハージルーンと238名のアンサールを率いて出撃した。マッカ側も、ムハンマドの出撃の知らせを受け、ムハンマド迫害に執念を燃やしていたアブー・ジャフルが950名の軍勢を率いて出撃した。アブー・スフヤーンは危険を察知して、隊商をたくみに誘導し、攻撃を避けることができた。しかし、アブー・ジャフルはこの機に、ムハンマドを潰すべく、3月15日紅海沿岸のバドルの地でムハンマドと大決戦を行なった。

結果は、ムハンマド側の圧倒的大勝利に終った。マッカ側はアブー・ジャフルをはじめ70名ほどの戦死者と、ほぼ同数の捕虜を残して敗走した。ムハンマド側はわずかに10数名の戦死者を出したにすぎなかった。

バドルの戦いで得た戦利品と捕虜の身の代金は莫大な金額となった。バドルの戦いの直後に下った啓示により、戦利品の5分の1はムハンマドが彼の家族とイスラーム教徒の困窮者救済の費用として受け取ることを神から許された。

ヒジュラ以後、ムハージルーンはアンサールの世話になっていたが、この戦利品により彼らの経済的自立が成り立ってきた。

このバドルの勝利は、永い苦難の日々の連続であったイスラーム教徒に与えられた神からの恩寵であると受け取られた。3倍の敵に大勝利をおさめたイスラーム教徒は絶大なる自信を持ち、ムハンマドはマディーナで宗教的指導者としてばかりではなく政治的指導者としての地位も確立し、イスラーム共同体は強固になりつつあった。

バドルの戦いの後、イスラーム教徒側とユダヤ教徒との決別も決定的となり、キブラ変更に次ぎ、ムハンマドはユダヤ教徒の慣習から取り入れた1月10日の断食に代えてラマダーン月一ヵ月間の断食をイスラーム教徒に課した。それはバドルの勝利に対する神への感謝であるとされている。また、その一ヵ月後、ユダヤ支族カイヌカー族追放事件が起こった。その事件の発端は市場でイスラーム教徒の婦人に悪ふざけをしたユダヤ教徒をイスラーム教徒の一人が殺し自分も殺されたことである。ムハンマドはカイヌカー部族の村を包囲し、無条件降伏を強い、カイヌカー部族全員がシリアへ追放された。

この裏には、ユダヤ教徒がムハンマドのマッカへの政策に反対する者と親密な関係にあったことや、商業上の利益の点でイスラーム教徒と衝突していたことなどが言われている。

（18）ウフドの戦い

バドルの戦いの後、マッカの指導者となったアブー・スフヤーンは復讐戦に備えて 着々と準備をすすめ、ちょうど一年後の625年3月（H．3年10月）なかば、3000人の大軍を率いてマッカを出立した。3月21日、彼らはマディーナの郊外ウフドの丘に辿り付き、マディーナの町中の砦からムハンマドの軍勢を誘きだす作戦に出た。

メッカ軍の侵入の知らせを聞いたムハンマド勢は、総勢700名で、ウフド丘の中腹に陣取った。

戦闘開始直前に、出撃に反対していた長老アブドッラー・ビン・ウバイイがその一族を連れてマディーナに戻った。彼らの事はクルアーンの中でムナーフィクーン（似非信者）と呼ばれ、彼らに対する怒りが随所に現われている。

戦闘は激烈をきわめ、双方ともに多数の死傷者を出した。ムハンマドも顔面を負傷し、彼が戦死したという流言が広がり、イスラーム教徒の多くが狼狽しマディーナへ逃げ帰った。ムハンマドと少数の部下がウフド中腹に残っていたが、突然アブー・スフヤーンはマッカ軍に戦闘の中止を命じマッカへの帰路についた。

結果は、戦死者の数はマッカ軍27名、ムハンマド軍70名あまりであり、これだけで判断すればマッカ軍の勝利であった。しかし、クライシュ族の目的はイスラーム共同体の壊滅を望んでいたのであり、その点から見た場合には決してマッカの完全な勝利とは言えない。アブー・スフヤーンが突然戦闘中止を命じたのは、彼の氏族の死傷者が多かったゆえであり、また戦闘前に引き上げたアブドッラー・ビン・ウバイイの反ムハンマド活動に期待したようである。

このウフドの戦いは、いかなる逆境の時でも必ずバドルの戦いの時のように神は助けてくれると確信していたイスラーム教徒たちに大きな衝撃を与えた。しかし、ウフドの結果は、神がイスラーム教徒たちの不従順に対する戒めであり、信仰に対する試練であると受け止めることで、彼らは自らを納得させた。

研究会報告

【平成21年度第1回タフスィール研究会開催】

今年度第1回目のタフスィール（クルアーン解釈）研究会が、5月16日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。今年度はクルアーンの第5章を7回に分けて読んでいく予定だ。このタフスィール研究会も4年目を迎え、会場も新校舎で新たな気分で始められた。第一回目（1～7節）は例年のように当研究所の森伸生所長が担当した。

محتويات العدد

1.اجتماع مجلس المدراء لمجلس الحلال الدولي
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : توشيئو إندو
2.المؤتمر الدولي للطعام الحلال 2009م تركيا
رئيس لجنة الشريعة بمعهد دراسات الشريعة : هيديئومي موتو
3. المؤتمر العالم الواحد والعشرون للمجلس لأعلى للشئون الإسلامي بمصر
مدير معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
4. مقال : القلق الأمريكي للتأثير الروسي والصيني المتزايد في آسيا الوسطى
باحث بمعهد دراسات الشريعة : تاكاهارو ناكاجيما
5. مقال : الخلفاء الراشدين (2)
مدير معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
6. مدخل علوم القرآن (4)
باحث بمعهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
7. السيرة النبوية (8)
أخبار المعهد:الدورة الأولى لدراسات التفسير سورة المائدة